

共愛社理事者の一人は、曾つて編者に告げて、

『共愛女學校歴代の校長中、川合信水氏は人物でありましたが、其の以外に於て傑出した人は現校長周再賜先生であります』

と言つた。かく其の人を名ざして品階することが、良いかわるいかは知らないけれども、編者も又其の言を首肯せざるを得ない。

諸學校の校長には夏冬の休暇があり、勤務時間と自由時間といふものがあるけれども、周校長にはそれが無い。周校長は校内に居住して、敢て自ら自由時間といふものを有たんとせず、定期の休暇を取らうとせず、身も心も學校を離れたことなく、學校を生活して寧時なく、學校の爲に生命を賭けてゐる。若し夫れ病臥の時と雖も、校務を他人に委ねることはしない。醫師が絶對安靜を求むるが如き場合に於てすら、尙且つ校務の爲には面會を謝絶しない。忠實以上の忠實である。斯うして周校長の過勞は、屢々學期末に於て校長を病囚とした、幸に病臥せずして濟む場合は奇蹟と傲すべきである。

更に又、教育に熱心なること周校長の如きは稀有である。素より教育家であるからには、教育に熱心なればとて、开は當然の事であるといふ者があるかも知れない。併しながら教育家必らずしも教育の熱心者ではない。世の所謂教育家の多數者は、教育の型式を整ふるを以て能事と傲し、巧みに號令をかけ得るを以て足ると思つてゐる。周校長に至つては、其の托せられたる全校生徒を以て自家の責任となし、一人々々の個性を理解し、其の卓れたる人格と精神とを以て、學生の人格と精神とに肉迫し、彼らが入學より卒業に至るまでそれ／＼に必要な指導を與へられんとする。其の目

的の爲には、その家庭をも開放し、夫人も又よく校長に協力して盡瘁して居られる、斯の如きは、天下廣しと雖も珍とすべきであり、本校の誇と傲すべきであると考へる。

猶、周校長が、時代の趨向を逸早く感知して時局に即應し、克く決戦下の帝國臣民としての正しき女子教育の方針を樹立して誤らず、現下の事態に善處せられつゝあることは、我等の喜び感謝し且つ誇とするところである。

修史の後

以上、匆卒の間に成したところであるから、甚だ不完全ではあるが、一應本校の歴史の編述を終了した。こゝで編者として、尙一言を加へさせて頂きたい。

本校は、今や大東亞戦下皇國興隆の大機に際し、此の熾烈なる戦火を冒して、赫々の『皇運を扶翼し』奉り、東亞大建設の宏業に參與し得る皇國日本の眞女性を打成し、一片報國の赤誠を披瀝せんことを志し、幸にして全校四百三十有餘名の者が教職員も生徒も一丸となつて匪勉努力し、着々使命に邁進してゐるのである。我が皇國としては、蕪々二千六百有餘年の史上に於て、未だ曾て現時ほど素晴らしい時代を見たことはなかつた。今は實に、我が建國以來初めて見る光輝ある時代であるが、此の皇國の大使命を認識し、皇國の要請に即應すべき不斷不退の心構を堅持して來た本校としても、皇國の昌榮と共に校運の進展を見、今日は、本校史上曾て見ざるの盛運に乗じてゐると思はれる。是れ寔に、深き神寵に由り、上 一天萬乘の御稜威の下、有難き國家諸衆の洪恩による所と感激して、尙も熱志奉公の誠を盡したいと力めて居るのである。が、同時に思ふことは、今日本校を斯く在らしむる爲に直接盡瘁せられた幾多の恩人たちのことである。本書中其の芳名を載録し

たるものは、極めて少数の著しき人々に過ぎない。茲に登掲の榮を得なかつた方々にして、或は常議員として、或は教員として、或は職員として、忠信以て本校の爲に奉仕したる夥しき人々がある。彼らの或る人々は、或は無給で應援し、或は不當なる薄謝で勞苦し、或は無給の奉仕を爲しつつ尙其の上にも本校の經費を助け、或は校外に在つて身心を勞して本校の爲に盡し、或は更に社會の他の方面に向つたならば大に優待せられ相當にやれるであらうと思はれる逸器英才を惜氣もなく本校の爲に献げ盡して涙のこぼれる様な奉仕をして來た。算へ來れば際限が無い。現在校内に奉仕してゐる教職員諸氏にしても、孰もみな然うした人々である。本校は他の社會のその如く奉仕者を優遇しない、教職員の勞苦に相當したる報酬を與へない。本校當局とても、教職員の奉仕に對して、十分に報ひたいと思はないでは無い、唯だ如何せんそれを爲し得ないのである。而して、それを爲し得ないところに於て、本校の特色が維持せられ、活ける働が成されてゐる様に自負し、薄か我らが心を慰め誇に似たるものをさへ感ぜしめられてゐるのである。まことに、本校の主義精神を理解することなしに、本校の奉仕者となることはできない。本校は、徹頭徹尾、報國の烈志に本づく奉仕事業である。本校の事業は、實に尊貴なる犠牲と献身との結晶である。編者は、編述の都合上、幾多の奉仕者の令名を一々採録するの煩ひを省いたけれども、彼らの勞功に對しては滿腔の謝意を致してゐる。

本校が今尙、外觀の整はざるが如く、將た内容の缺けたるに似たる様な在るを以て、本校教育の價値を品降されてはならない。本校の眞實なる價値は、其の見ゆる所の形骸に於て存しない、之を今日に育成せしめたる精神に於て在る。まことに、烈々たる敬神報國愛民の志念に燃えて祖國の將來の爲に、女子教育の事を一念に生き抜いた志士等の精神は、没すべからざるものである。本校は、既述した所に由つて知らるゝ如く、世間往々にして見受くる學校を喰物にする營利學校とは、全然其の選を異にしてゐる。本書を通讀した人々は、それを理解し得たであらうと思ふ。乃ち、其處に、本校が今日の時代に於て尙、我が國の女子教育に對する一大使命を自覺して存立する所以の理由があるのである。編者は、斯言を做すと雖も、徒らに壯語佳辭を駢列して世人を瞞着せんとするものではない。是れ眞に現實指掌、本校の歴史が實證する所を強調したに過ぎない。幸に本書に由つて、本校の關係者等は、本校を再認識せらるゝこととなり、更に從來本校を知らなかつた人々が、本校の眞價を認識せらるゝこととなり、編者の勞は報ひられて餘り有りと做すべきである。

創立以來の教職員

氏名	受持	就任年月日	辞任年月日
不破唯次郎	修身、校長	明治二十一年二月	明治二十四年八月
不破清		明治二十一年二月	明治二十四年八月
村山雪	英語	明治二十一年二月	
内田桑太郎	音樂	明治二十一年二月	明治三十五年十二月
深井芳	裁縫	明治二十一年二月	明治四十三年八月
青柳新米	地理、數學	明治二十一年二月	明治二十六年
中西弘道	國漢	明治二十一年二月	
深澤利重	幹事	明治二十一年二月	
M.H.シエツド	幹事	明治二十一年二月	明治二十七年三月
須田明忠	幹事	明治二十二年九月	明治四十一年十二月
須田巳喜	幹事	明治二十二年九月	明治四十一年十二月
今田まぢ	幹事	明治二十二年九月	明治四十年十二月
加藤徳			
大石陸世	校長	明治二十四年八月	明治二十九年一月
林千浪			
杉田潮			
立石常			

河邊文三郎	音樂	明治二十四年九月	明治三十年三月
W.H.ノイス		明治二十四年九月	明治三十年三月
H.F.バミリー		明治二十七年三月	明治三十二年十一月
伊庭菊次郎	校長	明治二十八年九月	明治三十一年七月
松本勲十郎		明治二十九年一月	
山田篤			
岡田民			
三谷民			
山本徳		明治二十九年一月	
矢島妙		明治二十九年六月	
大竹清		明治三十年四月	
平山喜八			
齋藤淳	國漢	明治三十一年一月	
ミセス・アルブレクト	校長	明治三十二年三月二十五日	明治三十七年十二月
堀貞一	英語、聖書	明治三十二年九月	明治三十三年一月
白井俊一		明治三十一年四月一日	昭和六年七月三十日
グリスオウルト			
小鹽狂忠			
小鹽歌			
堀愛			

厚木直三
加藤重郎
久野正香
山口仁
横山代
ミス・ベトリー
ミス・キース
玉眞峯子
ミス・ホイナ
大沼竹次郎
小松しん
田中たき
栗屋龍
岡田茂
大谷く
原久
津田興起
川合信水
進藤清

教 學

地 歴

英 語
國 漢
教 師、
校 長

明治三十四年四月
明治三十四年六月

明治三十三年一月
明治三十四年四月

明治三十六年一月
明治三十六年九月

明治三十七年四月

明治三十七年一月
明治三十七年五月
明治三十七年七月

明治三十四年四月
明治三十七年五月
明治三十六年九月

明治三十六年四月
明治三十六年十二月

明治三十六年七月

明治四十一年三月三十一日
大正五年三月三十一日
明治四十年十二月

松本さく
岡本敏
津村みつ
白崎つ
岩城寛
伊藤モト
佐藤廉蔵
小林榮
高橋つね
東辰蔵
多比羅たか
青柳新米
青柳美哉
齋藤まさ
北村泰三
金井つ
片山健
岡戸菊
寺澤精一

裁 縫

英 語

家 事

音 楽

裁 縫

理 科

裁 縫

校 長

作 法

音 楽
英 語
修身、
數學

明治三十七年五月

明治三十八年四月四日
明治三十八年四月五日
明治三十八年四月十三日

明治三十八年九月五日
明治三十九年六月
明治三十九年九月

明治三十九年十月
明治三十九年十二月
明治四十年四月二十五日
明治四十一年一月

同
明治四十一年三月三日
明治四十一年四月一日
明治四十一年四月一日

明治四十二年六月二十八日
明治四十一年四月一日
明治四十一年十月十六日

明治四十年十二月四日
明治四十三年三月三十一日
明治四十一年四月一日

明治三十九年七月
明治三十九年十月

明治四十年三月四日
明治四十二年十一月一日
大正二年三月三十一日
大正十一年八月三十一日

同
明治四十一年八月四日
明治四十二年六月十八日
明治四十四年四月二十九日

明治四十三年三月三十一日
明治四十三年三月三十一日
明治四十三年十月三十一日

新井	狩野	布施	同	林	吉	大	山	福	笠	黒	同	佐	佐	同	内	豊	杉	松
井	野	施	同	盛	田	西	口	崎	原	田	人	藤	藤	同	田	田	村	宮
ア	万	リ	人	太郎	は	正	久	ま	り	治	人	宗	正	人	太郎	五	五	晴
サ	作	き	人	郎	つ	直	さ	さん	ん	治	人	次	男	人	郎	郎	郎	子
理科、 数学	園	裁	同	園	家	音	家	合	体	英語、 数学	同	理	理	習	習	理	華	茶
書	書	経	書	事	榮	亦	監	操	科	地	字	字	科	道				

明治四十四年四月十日	明治四十四年四月十日	明治四十四年一月十六日	明治四十四年十一月二十八日	明治四十四年一月十六日	明治四十三年十一月一日	明治四十三年九月十六日	明治四十三年五月十八日	明治四十三年四月二十五日	明治四十三年四月二十六日	明治四十三年四月十一日	大正四年九月十一日	明治四十三年四月十四日	明治四十三年四月十一日	大正二年四月三日	明治四十三年四月十四日	明治四十二年十一月五日	明治四十二年九月十一日	明治四十二年九月一日
明治四十四年九月二十日	明治四十四年三月三十一日	明治四十四年七月三十一日	明治四十四年三月三十一日	明治四十四年三月三十一日	明治四十四年三月三十一日	明治四十四年三月三十一日	明治四十四年三月三十一日	明治四十四年三月三十一日	明治四十四年三月三十一日	明治四十四年三月三十一日	明治四十四年三月三十一日	明治四十四年三月三十一日	明治四十四年三月三十一日	明治四十四年三月三十一日	明治四十四年三月三十一日	明治四十四年三月三十一日	明治四十四年三月三十一日	明治四十四年三月三十一日

河合	高柳	小林	小菅	奈	岡	山	大	島	上	依	安	塚	菊	吉	高	野	岡	高
合	柳	林	菅	其	田	中	井	村	山	田	村	越	地	田	相	口	崎	畑
菊	治	け	ト	そ	啓	も	ナ	マ	道	サ	サ	シ	キ	光	米	隆	隆	隆
	子	さ	ク	う	蔵	と	ヲ	ス	造	キ	菊	グ	ヌ	子	次	郎	郎	郎
理科、 数学	家	國	裁		國	裁	裁	裁	理	裁	家	裁	數	數	家	音	數	合
書	事	語	経		書	経	経	経	科	経	事	経	操	學	事	榮	科	監

大正五年五月十一日	大正五年五月十一日	大正五年四月十一日	大正五年四月十一日	大正四年九月十一日	大正四年九月十一日	大正四年四月十一日	大正三年四月十三日	大正三年四月十三日	大正三年一月二十一日	大正二年四月二十一日	大正二年二月二十一日	明治四十五年二月二十一日	明治四十四年十二月一日	明治四十四年九月十一日	明治四十四年四月十日	大正三年十二月三十一日	明治四十五年二月二十日	大正九年三月三十一日	大正二年二月十一日
大正六年三月三十一日	大正七年七月三十一日	大正七年六月三十日	大正六年四月十五日	大正五年一月十一日	大正五年二月八日	大正五年三月三十一日	大正四年三月三十一日	大正四年八月三十一日	大正三年七月三十一日	大正五年七月三十一日	大正二年四月三十日	大正二年四月三十日	大正二年四月三十日	大正二年四月三十日	大正二年四月三十日	大正二年四月三十日	大正二年四月三十日	大正二年四月三十日	大正二年四月三十日

岸久子	關保子	山口克子	山本克子	相川澄子	戶部千江子	竹中其枝	長岡さだ	根岸靜惠	管井吉郎	江原秀四郎	濱田庄四郎	大畑なを	濱井成一	近藤孝友	小林みよ	大畑なを	半田愛子	神崎照子	市原澄子
理科	理科	國語	國語	華道	國語	裁縫	生徒監	歴史	數學	地理	博物	博識	公民	書記心得	體操	家事	國語	國語	裁縫
昭和十四年四月一日	昭和十四年四月一日	昭和十四年四月一日	昭和十四年四月一日	昭和十四年五月五日	昭和十四年四月三日	昭和十五年四月四日	昭和十五年四月四日	昭和十五年四月四日	昭和十五年四月四日	昭和十五年四月四日	昭和十五年四月四日	昭和十五年九月一日	昭和十六年四月一日	昭和十六年四月四日	昭和十六年四月九日	昭和十六年六月三日	昭和十六年八月十八日	昭和十六年九月一日	昭和十七年一月十日
昭和十五年八月一日	昭和十六年三月二十五日	昭和十四年六月二十六日	昭和十五年七月三十一日	昭和十六年八月十三日	昭和十六年十二月二十四日	昭和十五年五月二十八日	昭和十七年十二月	昭和十五年十一月三十日	昭和十七年三月三十一日	昭和十七年八月八日	昭和十七年十二月二十四日	昭和十七年十二月二十四日							

昭和十七年七月二十九日

卒業生數一覽

伴久美	武内貞子	今津つね子	高橋ゆき	木村平藏	新井副子
國語	英語	裁縫	音樂	數學	音樂
昭和十七年四月四日	昭和十七年四月四日	昭和十七年四月四日	昭和十七年四月二十五日	昭和十七年六月十二日	昭和十七年八月二十六日
昭和十五年八月一日	昭和十六年三月二十五日	昭和十四年六月二十六日	昭和十五年七月三十一日	昭和十六年八月十三日	昭和十六年十二月二十四日

回数	第一回	第二回	第三回	第四回	第五回
年別	明治二十五年	明治二十六年	明治二十七年	明治二十八年	明治二十九年
本科	三	三	七	三	五
選科	二	一	一	一	一
裁縫科	一	一	一	一	一
補習科	一	一	一	一	一
計	五	三	七	三	五
入會者	一	一	一	一	一

十五年
十六年
十七年
十八年(豫算)

敷地 建物 (昭和十八年一月)

一、一八〇、〇〇〇
一、二〇〇、〇〇〇
一、二五〇、〇〇〇
一、二五〇、〇〇〇
一、四八〇、〇〇〇
一、五〇〇、〇〇〇
一、五五〇、〇〇〇
一、五五〇、〇〇〇

一、敷地

宅地

畑地 (五反三畝二十五步)

三、八三九、五六
一、六一五、〇〇
五、四五四、五六

二、建物

名譽

共愛館

共勵館

育愛館

記念館

親和館

常盤館

二階坪數

一二〇、〇四

一階坪數

一二〇、七〇

總坪數

二四〇、七四

鐵筋コンクリート

木造瓦葺

木造瓦葺

木造瓦葺

四六、〇〇

四六、〇〇

五九、七五

六六、〇〇

一四六、二〇

一四六、二〇

一九二、二〇

一九二、二〇

思恩寮
二葉寮
清身寮
信愛館
喜望館
愛光寮
共和館
松蔭莊

同
同
同
同
同
木造瓦葺
木造瓦葺
同

二五、〇〇

一三、五〇

六三、五〇

二六、〇〇

三四五、二九

三二、五〇

二九、二五

三六、〇〇

二五、二五

八六四、九五

三二、五〇

五四、二五

三六、〇〇

三八、七五

一、二〇八、二四

273
58

昭和十七年十二月二十八日印刷
昭和十七年十二月三十一日發行
(非賣品)

編輯兼發行人
前橋市岩神町一三一
共愛女學校內
菅井吉郎

印刷人
前橋市岩神町七五三
樋口清太郎

印刷所
株式會社上毛新聞社

發行所
前橋市岩神町一三一
共愛女學校
電話前橋三一〇番
振替東京一六一九五番

